



▲モルダウ川

の曲を作るために、モルダウ川まで何度も足を運んだという。断崖にさしかかり、荒れ狂う川。低音の楽器から高音の楽器までうまく使い分け、同じリズムのくり返して、一波くるとまた一波という激流の感じを出している。断崖の上でこの光景を見ていたスメタナのイメージは、僕達に確かに伝わってくる。そしてラスト。ラストの部分で、「いいなあ」と思ったのは、弦楽器が上昇、下降をくり返しているところだ。川が「生きている」という感じがして、とてもいいと思う。

「モルダウ」に心を捉えられた僕は、どうしても「我が祖国」の全曲が聴きたくてたまらなくなった。だから全曲入りのCDを手にした時は、とてもうれしくて、すぐに六曲続けて聴いてみた。一曲ずつ特徴があり、どれもいいのだが、やはり、聴き慣れた「モルダウ」そして、「モルダウ」にもその主題が取り入れられている「ヴィシエフラト」が僕は気に入った。連作交響詩「我が祖国」の第一曲「ヴィシエフラト」の冒頭のハーブは、明るくさわやかで、希望を感じさせる。「モルダウ」に出てくる「ヴィシエフラト」の変型主題の様な力強さはないのだが、僕はこのハーブの演奏する主題も好きだ。第一曲全体としては、

楽しい集いと勇敢な戦いを連想する。盛り上がり、シンバルとトライアングルのヴィシエフラトを舞台とする勇壮な物語がか境に入ったことを告げているようだ。「モルダウ」を聴いた時にも思ったのだが、スメタナは、シンバルやトライアングルの効果的な使い方ができる人だ。どちらの楽器も、もちろん主旋律を演奏するものではない。けれど、「ここだ」という所で、とても効果的に曲を盛り上げていると思う。

ところで、「祖国」への想いはと問われても、僕は返事に困ってしまう。スメタナの場合はどうだろう。当時、ボヘミアは他国の政治的支配下にあり、言葉はもちろん、音楽的にも他国の影響下にあったという。スメタナ自身も、ドイツ語の教育を受けていたらしい。やがて革命運動が起こり、彼は、一生懸命勉強したチェコ語で、「自由の歌」などを作曲し、精神的に革命運動を応援したという。「祖国」の困窮の中でスメタナは、「祖国愛」に目覚めたのではないかと思う。「モルダウ」の中の激流の部分のティンパニの（へ）は、祖国の荒れ狂う運命を、続くヴィシエフラトの主題は祖国の夜明け（明るい未来）を表現しているように僕には聴こえる。スメタナは「我が祖国」を作曲

途中に、聴覚を失ったという。しかし、この曲から、そんな暗さは聴こえてこない。それは祖国の窮乏、肉親の死、聴覚異常といった数々の悲しみや苦しみを精神的強さで乗り越えたスメタナの、清々しい魂から生まれた曲だからであろう。

スメタナは「チェコ国民音楽の父」と呼ばれ、彼の命日に開幕される音楽祭「プラハの春」では、まず、「我が祖国」の六曲が通して演奏されるという。CDを聴きながら僕はその様子を想像する。今もチェコではスメタナは音楽の上での国民的英雄であろう。彼の存在が僕の中でそうであるように。

いつか僕もヴィシエフラトの丘に立ち、モルダウの流れを見たい。

僕はこの曲に三つの楽しみをみつけた。

「音楽」と「絵」と「物語」だ。そして何回も聴き考えているうちに、二つの夢もみつけた。一つは、音楽祭「プラハの春」にいつか行ってみたいということ。もう一つは、スメタナのような強い生き方をしたいということ。

僕は今、同じボヘミアの生まれである作曲家、ドヴォルザークの曲を聴きたいと思っている。ドヴォルザークの曲からも、夢と楽しみをみつけることができていることを信じて……。

<> 音の強弱をつけること